

中文摘要

雙重面相

— 1950 年代後半張學良的自敘 —

若松 大祐 (WAKAMATSU, Daisuke)

前言

- 一、張學良自敘的機制
- 二、應用正統性
- 三、顧慮正統性
- 四、套用正統性而驗證
- 五、同化於正統性
- 六、正當的正統化

前言

張學良 (1901-2001) 在 1950 年後半期台灣，撰寫四篇自敘。那麼張要撰寫的目的是甚麼？本文是透過探討四篇張學良自敘，即其特色可以形容為「應用正統性」、「顧慮正統性」、「套用正統性而驗證」、「同化於正統性」的四篇，而已經得到「張學良為了主張自己過去的有用性而撰寫自敘」之結論。現在擬首先提示張學良自敘共通的機制，其次將之由具體的四篇自敘而進行確認，最後由此提出張自敘的「正當的正統化」此一方法。

一、張學良自敘的機制

所謂自敘是自己敘述自己的。據說，自敘的機制是，作者試圖向讀者進行契約有關作者、敘述者、登場人物的同一性。實際上自敘擁有更複雜的機制。本文認為張學良自敘擁有如下機制，即，有存在兩個敘述者，而且兩個都主張「過去的有用性」之機制。第一個敘述者主張在過去自己行為中的有用性。此際，敘述者將現在自己的存在意義，尋求於一個曾經實行正當行為的過去自己。對此，第二個敘述者是將自己過去視為失敗。敘述者主張從自己過去的失敗經驗得來的教訓在現在所發揮的有用性。此際，敘述者將現在自己的存在意義，尋求於一個向同一時代世人就可以提示教訓之現在自己。同一時代世人是被權威視為敘述者的過去是失敗的。

那麼我們如何把握而理解如此張學良自敘的機制？本文注意到在四篇張學良自敘中所定位的登場人物（主角）張學良所扮演的角色，由此把握而理解兩個敘述者的存在。

另外本文經過探討張學良撰寫的當時生活背景，而且由於與同一時代「黨國正史」（當時的官方歷史）的比較，來明確他的撰寫自敘是被蔣中正強迫的，而且所謂讀者是特定蔣中正。因此從「黨國正史」的形成這一觀點來看，我們亦可說，

張學良自敘的真正作者是蔣中正，也不為過。

## 二、應用正統性

在第一自敘〈西安事變反省錄〉(1956-57年)中，登場人物自己扮演一個角色，即作為蔣中正的部下誠實邁進國內統一、一致抗日的實現。從此發現的敘述過去自己的敘述者立場是，主張自己在過去對國家曾經表現的有用性之立場。同時登場人物張學良是被描述作為一個敘述者認為正當的思想之強烈抗日意識的人物。而且敘述者為了對這些人物的行為賦予正當性，同時應用敘述者同一時代「黨國正史」的架構而敘述之。敘述者敘述的重點在於抗日，本來「黨國正史」所重視的國內統一是，變成為了抗日的一個過程。在此，過去的自己是肯定地被描述，敘述者也是積極地進行敘述。敘述者將自己認為正當的自我形象投影於登場人物的過去自己。因此本文將之稱為敘述者的正當立場。

與此不同，敘述者另外也有否定地敘述過去自己以及尤其現在敘述者本身。這些敘述者的出現，是特別在回憶西安事變的場面。在此，敘述者首先將自己過去視為「禍」。敘述者將「禍」的原因尋求於自己心裡曾經存在的不安定性，而進行自問自答。然後敘述者將過去失敗的經驗作為一個教訓，提示於敘述者現在所屬的國家之反共鬥爭政策。由此，敘述者主張從自己過去得來的現在有用性。可是，敘述者敘述的重點是在自我省察而不是在提出教訓。反正，如此反省或提出教訓是，作者張學良被他者強迫的形象。所以，此敘述者是對應於權威所具有的正統性。因而本文將此稱為敘述者的正統立場。

以上可以確認，在〈西安事變反省錄〉此一自敘中，存在兩個主張過去有用性的敘述者。而且此自敘的特色可以形容為應用正統性。可是，作者張學良的真意是在正當敘述者或在正統敘述者？實際上可以解釋為兩樣。因此只有針對〈西安事變反省錄〉一個內在完結的小宇宙，相當困難判斷。對於過去的有用性，一方面肯定過去(與現在)，另一方面否定過去而且肯定現在。擁有如此矛盾的就是，〈西安事變反省錄〉。

## 三、顧慮正統性

在第二自敘〈雜憶隨感漫錄〉(1957年4月)中，也可以發現正當敘述者與正統敘述者的存在。在此自敘中，作為登場人物來被描述的過去自己，是擁有各種各樣的角色。對此，本文方便上分成為四種，即觀念性自我(理性主義者、良心人物)、社會性自我(權力者的兒子、當政者、軍人)、國族主義自我(張家之子、東北人、中國人)、正統自我(國民黨員、蔣中正的部下)。過去自己扮演多種角色，而且自己行為的正當性是，由於圍繞多種自己的每個狀況之酌量情形的邏輯而保證。同時，多種自我形象雖然看起來是沒有秩序，但實際上是由於「為了救國」此一行動準則來決定希求角色(role expectation)的優先順序。救國此一行動

準則是，一方面意味著自己認為是正當的抗日，另一方面因顧慮「黨國正史」而意味著國家統一。敘述者敘述的重點在於抗日。反正在此，正當敘述者主張在過去自己行為對國家發揮的有用性。

另外，在敘述西安事變的部分，正統敘述者還是出現的。現在的敘述者自己本身變成爲正統敘述者所敘述的對象，即登場人物。在此，敘述者還是將從失敗經驗得來的教訓就提出於現在國家政策（反共抗俄），其敘述的重點還是在於尋找過失所在，即自己省察。

以上可以確認，兩個主張過去有用性的敘述者，都存在於〈雜憶隨感漫錄〉。而且，此自敘的特色是，形容爲顧慮正統性。正當與正統的兩個敘述者的關係，還是與前一個自敘一樣矛盾性的。可是，「黨國正史」因素對敘述者立場的影響也變成稀薄了，由此可說，作者對正統性的對應是從「應用」改變到「顧慮」。所以可以推測作者張學良的真意或許在於正當敘述者，而且若經過比較於〈西安事變反省錄〉，就更容易推測之。

#### 四、套用正統性而驗證

如上兩種自敘給我們的印象是，正當敘述者的優勢，對此第三自敘〈恭讀《蘇俄在中國》書後記〉（1957年8月）給我們相反的印象。主要的登場人物是正統敘述者自己本身，此際他的過去成爲由失敗經驗得來的現在教訓。如此正統敘述者提出的所謂團結的重要性此一教訓，其目的是使用在現在國家政策的反共抗俄此一目標上的。在此，教訓的意思重點從自我省察的材料改變到向國策的活用。因此可知，正統敘述者的敘述自己歷史，是由於套用「黨國正史」的《蘇俄在中國》而驗證。

另外，正當敘述者的存在，由於敘述到曾經儘力於國家統一的登場人物，而可以確認。但是正當敘述者的敘述是獨立於整個自敘脈絡。另外在前面兩種自敘中敘述的重點在於抗日，可是在此改變到在於統一。其原因是，同一時代的正史《蘇俄在中國》將近代中國史明確定義爲安內攘外（先統一、後抗日）。因此正統敘述者的敘述脈絡吞併正當敘述者。此自敘的特色可說是由套用正史而驗證自己過去的是非。

#### 五、同化於正統性

最後的〈坦述西安事變痛苦的教訓敬告世人〉（1958年），或許與其是自敘，不如是告發書。登場人物是告發自己受害體驗的正統敘述者自己本身。敘述者嘗試由於告發，而將自己過去的有用性標示於現在國家政策的反共抗俄。

另外，正當敘述者雖然有存在但是幾乎沒有出現而且若出現也沒有發揮本來意義。此敘述者只敘述，過去自己曾經扮演了在西安事變場面中保護蔣中正之角色。在此，過去自己的表現有用性的國家，就不意味者是需要抗日或統一的國家，

而意味者是蔣中正本身。

從而此自敘的特色，可說是同化於正統性。

#### 六、正當的正統化

總之，四篇張學良自敘都是由於正當敘述者與正統敘述者主張過去有用性，來擁有矛盾而構成的。也就是說，以時間的順序來看，兩個敘述者的關係在第一自敘形容為應用正統性，其次在第二自敘就形容為顧慮正統性，而正當敘述者優勢的。但是在第三自敘中，由於「黨國正史」的套用並驗證的特色來改變為正統敘述者的優勢。最後自敘中，其傾向更強化，而由此兩敘述者的敘述就同化於正統性。總之可言，張學良在自敘中使用「正當的正統化」此一方法，來主張自己過去的有用性。張學良就是，由於對應一套擁有正統性的「黨國正史」，而將自己認為正當的歷史認識，加以正統化而且鞏固其敘述的妥當性基礎。這張學良思想活動，我們可以理解為兩樣，即張對「黨國正史」的挑戰的失敗結果，或是其對之迎合的成功結果。因此本文將此兩聲性敘述，稱為敘述者張學良的「雙重面相」。

1950 年代張學良根據權威的正統性來保證自己敘述的妥當性基礎，那麼在國家對個人強迫認同官方歷史解釋的戰後中國時空上，張的如此思想有甚麼意義呢？另外張不得不對應正統性的所謂 1950 年代台灣政治時空，到底是如何時空呢？筆者擬將之作為今後課題。

【張學良自敘的機制】

作者	敘述者	登場人物（主角）	
		過去	現在（敘述者自身）
張學良	正當的立場	成功（有用性）←	愛國者
	正統的立場	失敗 —	失敗者 ↓ 教訓（有用性）

日本語要旨

二面相

－1950年代後半における張学良の自叙－

若松 大祐 (WAKAMATSU, Daisuke)

はじめに

- 一、張の自叙の構造
- 二、正統性の応用
- 三、正統性への配慮
- 四、正統性の援用と検証
- 五、正当性への同化
- 六、正当の正統化

はじめに

張学良（1901-2001）は1950年後半期の台湾において四篇の自叙を執筆した。ところで張学良はなぜ執筆したのか。本研究は、「正統性の応用」、「正統性への配慮」、「正統性の援用と検証」、「正統性への同化」という風にそれぞれ特徴付けられる張の四篇の自叙への考察を通じて、「張は自己の過去の有用性を主張するために自叙を執筆した」という結論を得た。以下で、まず張の自叙に共通する構造を提示し、そしてそれを具体的な四篇の自叙によって確認し、ここから張における「正当の正統化」という方法を導出する。

一、張の自叙の構造

自叙とは自己が自己を叙述するものである。作者と話者と登場人物との同一性について、作者が読者に対して契約しようとする構造を持つ、という見解もあるが、実際は複雑な構造をもっている。張学良の自叙には次の様な構造の存在が認められる。つまり、二人の話者が存在していて、ともに「過去の有用性」を主張する構造である。一人目の話者は過去における自己の行為の有用性を主張する。この際、話者は現在における自己の存在意義を、過去において正当な行為をしたかつての自己に求めている。これに対し、二人目の話者は過去を失敗として理解する。話者は自らの過去の失敗から得られた教訓が現在において持ち得る有用性を主張する。この場合、話者が現在における自己の存在意義を求めているのは、権威によって彼の過去が失敗であると考えている同時代の人々に対して、教訓を提示し得る現在の自己である。

ではこのような張の自叙の構造はどのようにして把握し理解することができるのか。本研究では、四篇の張の自叙において定義された登場人物としての張の役割に注目することで、二人の話者の存在を把握し理解する。

また張の当時の生活状況への考察や、同時代の「党国正史」（官製の歴史）との比較を行うことによって、張の自叙が蒋介石に執筆を迫られたものであり、読者に蒋介石が特定さ

れていることも判明する。従って「党国正史」の作成という観点に立てば、張の自叙の真の作者はむしろ蒋介石であるといっても過言でない。

## 二、正統性の応用

第一の自叙「西安事変反省録」（1956-57年）において、登場人物としての自己は、蒋介石の部下として国内統一・一致抗日の実現に誠意を以って邁進する、という役割を担っている。ここから判明するかつての自己を語る話者の立場は、過去において自己が国家に対して示した有用性を主張する立場である。また登場人物張学良は、一方で話者が正当な思想であると考えられる抗日意識の強烈な人物として描かれ、同時にこの人物の行為に正当性を与える為に他方で話者の同時代の「党国正史」を応用して描かれている。話者の語りの重点は抗日にあり、「党国正史」が本来重点を置く国内統一は抗日の為の一過程として定位されている。ここでかつての自己は肯定的に描かれ、話者も積極的に語りを展開している。話者は自身が正当であると考えられる自己像を、登場人物であるかつての自己に投影している。これを話者の正当的立場と呼ぶ。

他方これと異なり、話者はかつての自己や特に現在の話者自身について否定的に語ることがある。特に西安事変への回想の場面で、この話者が現れる。この際、話者は自身の過去をまず「禍」（わざわい）と見なす。ここで話者は「禍」の原因を自身の心のかつての不安定性に求め、自問自答する。そして話者はかつての失敗経験を教訓として、話者が所属する国家の現在の政策である反共闘争のために提示する。こうして話者は、自身の過去から得た現在の有用性を主張する。しかし、話者の語りの重点は教訓の提出より、自己省察にある。またこうした反省や教訓の提出は、作者張学良が周囲から求められている姿にほかならない。そこでこの話者は権威のもつ正統性に対応していることから、本文ではこれを話者の正統的立場と呼ぶ。

以上より、過去の有用性を主張する二人の話者が「西安事変反省録」という自叙の中に存在していることが確認される。そして、この自叙の特徴は正統性の応用であると表現できる。しかし、作者張学良の真意は正当と正統という二人の話者のどちらにあったのか。実は両用に読めるようになっている。いずれにせよ「西安事変反省録」という内在的に完結した一世界だけでは、判断が困難である。過去の有用性をめぐって、一方は過去（と現在）を肯定し、他方は過去を否定し現在を肯定するという矛盾の存在するのが「西安事変反省録」なのである。

## 三、正統性への配慮

第二の自叙「雑憶随感漫録」（1957年4月）においても、正当話者と正統話者との存在が確認される。この自叙で登場人物として描かれるかつての自己は、様々な役割を持っている。これを本研究では、観念的自己（理性主義者、良心的人物）、社会的自己（権力者の子、為政者、軍人）、ナショナリズム的自己（張家の子、東北人、中国人）、正統的自己（国民

党员、蒋介石の部下) というふうにより便宜的に四種類に分ける。多様な役割を担う登場人物としてのかつての自己の行為の正当性は、多様な自己を取り巻くそれぞれの状況の情状酌量の論理によって保証される。また、一見無秩序に描かれた多元的な自己像は、「救国のため」という行動原理によって役割取得の優先順位が決定されている。救国という行動原理は一方で自己が正当とみなす抗日を意味し、他方で「党国正史」に配慮して国家統一をも意味する。話者の語りの重点は抗日にあるが、とにかく過去において自己の行為が国家に対して持った有用性を主張する正当話者はここに存在する。

他方、西安事変を語る部分でやはり正統話者が出現する。現在の話者自身が正統話者の語りの登場人物となる。ここでも失敗経験からの現代的国策（反共抗ソ）への教訓の提出は行われるが、やはり語りの重点は過失の所在探しという自己省察に置かれる。

以上より、過去の有用性を主張する二人の話者は「雑憶随感漫録」の中に存在していることが確認された。そして、この自叙の特徴は正統性への配慮であると表現できよう。正当と正統という二人の話者の関係は、基本的に前述の自叙と変わらず矛盾적이다。しかし、話者の立場に対する正史的要因の影響が希薄になったことから、正統性への対応が「応用」から「配慮」へ変わったと考えられる。そこで作者張学良の真意は正当話者にあるのではないかと推測できるし、「西安事変反省録」と比較すると、こうした推測がより強まる。

#### 四、正統性の援用と検証

前述の二自叙が、正当話者の優位を印象付けるのに対し、第三の「恭読『蘇俄在中国』書後記」（恭しく『中国の中のソ連』を讀書しての後記、1957年8月）という自叙は、逆の印象を与えてくれる。主に登場人物となるのは正統話者自身であり、その際彼の過去は失敗経験から得られた現在における教訓となる。正統話者の提出する団結の重要性という教訓は、現在の国策である反共抗ソという目標下での使用を目的とされる。ここで教訓の意味が自己省察の材料から国策への活用に重点が移る。従って正統話者によって語られる自己史は、「党国正史」たる『蘇俄在中国』を援用しての検証であると判明する。

他方、正当話者の存在は、かつて国家統一に尽力したという登場人物への言及によって確認できる。しかし自叙本文の全体的な脈絡とは独立して語られる。また前述二自叙では抗日にあった語りの重点が、ここでは統一に移っている。原因は同時代の正史『蘇俄在中国』が近代中国を「安内攘外」（第一に統一、第二に抗日）と明確に定義したことである。このため正当話者は正統話者の脈絡に併呑されている。そしてこの自叙は正史を援用しての自己史における是非の検証であると表現しうる。

#### 五、援用の強化

最後の「坦述西安事変痛苦的教訓敬告世人」（西安事変という痛々しい教訓をすっかり述べて世の人に敬して告げる、1958年）は自叙というよりも告発書である。登場人物は自らの被害体験を告発する正統話者自身である。話者は告発することで現在の国策反共抗ソに

対して自己の過去が持つ有用性を示そうとする。

他方、正当話者は存在するがほとんど顔を出さず、また出しても本来的意味をなさない。話者はかつての自己が蒋介石を護衛する役割を十分に果たしたことに言及するだけである。ここでのかつての自己が有用性を示した国家とは、抗日や統一を必要とする国家でなく、蒋介石そのものを意味している。

従ってこの自叙の特徴は正統性への同化と呼び得る。

## 六、正当の正統化

以上、張の自叙全四篇が、正当話者と正統話者という、ともに過去の有用性を主張する二人の語りによって矛盾的に構成されていることを確認した。つまり、時系列的に見るならば、第一の自叙で正統性の応用と特徴付けられた両話者の関係が、第二の自叙では正統性への配慮と特徴付けられるように正当話者を優位にさせた。しかし第三の自叙は「党国正史」の援用と検証という特徴によって正統話者の優位に方向転換し、最後の自叙でその方向が強化され、話者の語りは正統性へ同化した。こう考えた時、張は自叙において「正当の正統化」という方法を使って、過去の有用性を主張したと言える。張は、正統性ある「党国正史」に対応することで、自らが正当とみなす歴史認識を正統化し根拠づけようとしたのである。この思想活動は張による「党国正史」への挑戦の失敗結果とも、それへの迎合の成功結果とも両様に理解できる。そこで本研究はこのような両声的な叙述を話者張学良の「二面相」と名付けた。

1950年代の張は自己の語りの妥当性を権威の正統性によって保証したと考えるならば、国家が個人に官製の歴史解釈の共有を迫る戦後中国において、彼のこうした思想はどういった意義を持つのか。また、張が正統性に対応せざるを得なかった1950年代台湾政治空間はどのような時代だったのか。今後の探究の課題としたい。

【張学良的自叙の構造】

作者	話者	登場人物（主人公）	
		過去	現在（話者自身）
張学良	正当的立場	成功（有用性） ←	愛国者
	正統的立場	失敗 —	失敗者 ↓ 教訓（有用性）